第155回定期演奏会への誘い

京都市立芸術大学 音楽学部 音楽学専攻 2・3回生

Symphony No.1 Op .21

Ludwig van Beethoven

交響曲第1番 ハ長調 作品21　／　ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン　Ludwig van Beethoven　(1770～1827)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツの都市ボンで、テノール歌手のヨハンの長男として生まれた。出版作品数は398。

●ボン時代（1770 - 92）

ベートーヴェンは、早くから音楽の才能を発揮した。宮廷オルガン奏者のネーフェから音楽の基礎を習うと、すぐにその助手となった。92年にベートーヴェンは、ボンに立ち寄ったバッハに自分の曲を見せ、ウィーンのハイドンの下で学ぶ許可を得、ウィーンへと向かった。

この時代のベートーヴェンは、まだ交響曲やピアノ協奏曲などを作曲するには至っておらず、彼を支援したヴァルトシュタイン伯爵は、「不断の努力によって、ハイドンの手からモーツァルトの精神を受け取り給え」という言葉を彼に送っている。

●ウィーン時代（1792 - 1827）

▽前期(1792-1801)

ハイドンらの下で対位法を学ぶと同時に、ピアノ演奏家として活躍した。交響曲1，2番、弦楽四重奏曲（作品18）といった古典派の中心的ジャンルでの創作を試み、モーツァルトやハイドンの伝統を越えた新しい領域の拡大を模索している。

1798年、ベートーヴェンは耳が聞こえづらいことに気が付く。難聴は悪化し、30歳になるころにはほぼ聞こえなくなっていた。そして1802年に、ベートーヴェンは2人の弟宛の〈ハイリゲンシュタットの遺書〉と呼ばれる手紙を書いた。内容は本来の遺書ではなく、彼を悩ませ続けていた難聴の危機を乗り越え、作曲家としての使命を全うすることを決意するものである。

▽中期(1802-12)

〈ハイリゲンシュタットの遺書〉以後、ベートーヴェンの作風は劇的、英雄的な様式へと変わり、次々と作品が生み出された。とりわけ1804年からの10年間は後に〈傑作の森〉と呼ばれ、オペラ『フィデリオ』や交響曲第3番《英雄》など多くの名作が書かれている。音楽はソナタ形式にとらわれず、持続する経過のなかで生成、発展し、一つの楽章は拡大された。また、《運命》《田園》の交響曲では動機的主題により楽章が展開されている。

後半は〈後期様式〉への移行期で、楽章の主題性が再び確保され、歌謡的で抒情的な旋律が主題として用いられる。

▽後期(1813-27)

〈後期様式〉は、後のロマン派音楽と共有する傾向と対位法や変奏を好む傾向という、相反する傾向をもつ。

ベートーヴェンは、肺炎により体調を悪化させ、1827年3月26日に56歳でこの世を去った。

交響曲第1番 ハ長調　作品21

ウィーンの青年 ベートーヴェン

ドイツ・ボンで生まれ育ち、音楽家を目指し研鑽を積んでいたベートーヴェン・。徐々にウィーンへと活動拠点をうつし、キャリアを積んだ。

交響曲第１番が作曲されたのは、1799～1800年頃だとされており、それはベートーヴェンがウィーンに落ち着き始めて７年ほど経った頃のことであった。７年というと、長いようで短い月日である。ウィーン到着当初はまだ無名であったベートーヴェンも、月日の中で徐々に名声を確立しつつあったのであった。

偉大なる先人 ハイドン・モーツァルト

ウィーン到着当初、ベートーヴェンの師匠でもあるハイドンは名音楽家としてその地に君臨、また既に世を去ったモーツァルトの存在も人々の心の中では未だ鮮明に残っていた。彼らの功績は大きく、それぞれ100曲以上もしくは40曲以上と残された交響曲を始めとする彼らの作品は、古典派音楽の様式を決定付けるものであった。

そんな時代の潮流にあるベートーヴェンはいかに自分の名を残すのか。ベートーヴェンがウィーンへと発つ際、ベートーヴェンを支援したヴァルトシュタイン伯爵は青年に向かってこんな言葉を残した。

「不断の努力をもってモーツァルトの精神をハイドンの手から受け取りたまえ」

偉大なる先人の残したものを受け継ぐために研究を重ね重ね行い、完成したのが交響曲第１番であった。

交響曲第１番

しかし交響曲第１番は、今までの伝統を受け継いだだけの作品ではなかった。ハイドンとモーツァルトの熟成した音楽様式を固持しつつも、自身の工夫を施し、刻印を残している。

まず特筆すべきは第１楽章の序奏。この作品は確かにハ長調であるのだが、早速冒頭１小節目は、ヘ長調のV7→Ⅰという衝撃的な出だしである。その後すぐにハ長調のV7の和音が現れるが、導かれる先はⅥの和音。しかしハ長調のまま進行せずにト長調を思わせる響きが登場する。なかなか本当の調性がわからない、まるで聴き手を焦らすような試みである。

第２楽章における優美なだけでない軽快さ、またメヌエットと名打った第３楽章の溢れるスケルツォ感、そしてまたもや予想を裏切る冒頭である最終楽章は、フィナーレにふさわしく若々しく駆け抜けていく。

若きベートーヴェンの強い個性が随所にみられる、まさに交響曲のデビューにふさわしい作品となっている。

後世への影響

交響曲第１番を皮切りに、周知の通りベートーヴェンはさらに８つの交響曲作品を残した。ベートーヴェンの交響曲は、彼自身の「論文」であると言われることがある。それほどに１つ１つの作品にベートーヴェン自身の研鑽と独自の創意の跡が残されており、そして作品を重ねるごとに進化していて、ロマン主義への一路へと導いている。

ベートーヴェンが残した功績は、後世に大きな影響を与えている。様式美を有した古典派音楽に傾倒したブラームス。第９番における合唱とオーケストラの融合に憧れ、楽劇を確立したワーグナー。また、第５番や第９番にみられる「闇から勝利へ」のモットーは多くの作曲家が採用している。

ベートーヴェンの影響下にある作曲家は、そのまた後世にも影響を与えた。そのようにして時代は巡り、音楽は逸脱と発展を繰り返してきたのであろう。

Concerto pour saxophone alto et orchestre

Henri Tomasi

サクソフォン協奏曲　／　アンリ・トマジ

アンリ・トマジ Henri Tomasi (1901-1971)

1901年　フランス南部の都市マルセイユにある労働者階級の町で生まれる。
1908年 7歳でマルセイユ音楽院に進む。
1921年 マルセイユ音楽院で学んだ後、奨学金を得てパリ音楽院へと進む。
　　作曲をポール・ヴィダル，指揮法をヴァンサン・ダンディとフィリップ・ゴベールに師事。
1926年　ローマ大賞、指揮部門で1位を獲得。
1930年 フランス領インドシナ放送の音楽監督を務める。
1932年　室内楽演奏の団体【ル・トリトン】を創設。
　　プロコフィエフ，プーランク，ミヨー，オネゲル，フェルーらとともに。
1949年 マルセル・ミュールによってサクソフォン協奏曲が演奏される。
1952年　事故に遭い、ほぼ聾唖になってしまう。
1953年　フランス音楽大賞、パリ市音楽大賞。
1956年　フランス、モンテカルロ歌劇場の音楽監督を務める。
1957年 難聴が進行するなどの身体的理由のため指導をやめる。
1971年 パリのモンマルトルのアパートにて死去。

アンリ・トマジの両親の出身は、フランス皇帝ナポレオンの出身地でもあるコルシカ島。

幼い頃は、船乗りになることを夢見ていたトマジ。音楽のレッスンをズル休みすることもしばしばあったそうだ。
マルセイユ音楽院在学中は、夏の休暇をコルシカ島の祖母の元で過ごし、コルシカの伝統的な歌を学んだ。

彼は、「地中海の光、色は私にとって大きな喜びである。心の部分からでない音楽は音楽でない。私はメロディストだ」と語る。

そのような影響からか、コルシカ島や東南アジアの要素のある作品が多く、『タム・タム』や『ヴェトナムのための歌』などの交響詩や協奏曲、『１２のコルシカの歌』などの歌曲がある。

音楽活動の中心は指揮者であったが、晩年にかけて作曲家としての活動に集中した。

彼が残した作品は100曲を超える。その中でも、管楽器のために書かれた作品は、管楽器奏者にとって貴重なレパートリーとして今日も演奏されている。

Daphnis et Chloé

Joseph Maurice Ravel

ダフニスとクロエ　／　ジョセフ＝モリス・ラヴェル

モリス・ラヴェル　Maurice Ravel　(1875～1937)

1875年3月7日、フランスのシブールで生まれる。音楽好きの父の影響で、7歳でピアノを始め、12歳で作曲の基礎を学んだ。

1889年にはパリ音楽院に入学し、ガブリエル・フォーレやエミール・ピサールらの下で音楽教育を受けた。

ピアノ曲の様式の重要な革新者であり、管弦楽法の天才であるとともに、洗練された和声を用いた。

ラヴェルの魅力は作品中に満ちている子供や動物への世界、また想像上の異国や古代の世界に対する共感によるところが多い。

性格・素顔

・非常に母思い

彼が、フランスのために第１次世界大戦に志願兵として任務を行っている際に、母の訃報を聞き、作曲意欲をなくしてしまった。

・ひねくれ者の一面？

彼は心優しいと言われているが、作曲に対しては違う一面を持っているようだ。ラヴェルは、常に新しい音楽への道を切り開こうとしていたが、初期の作品は決して新しいとは言えないロンド形式を用いている。しかし、彼にとって伝統的な手法で作った曲は大して思い入れがなかったのではないかと言われている。

・「オーケストレーションの魔術師」

この称号にふさわしくオーケストラの楽器の使い方が天才的である。例えば、「ボレロ」のように、メロディーを延々と繰り返し、最後に盛り上がって終わるような曲がある。

バレエ音楽

卓越したオーケストレーションのテクニックを持っていたラヴェ ルはバレエ音楽の分野でも彼の代表作といわれる作品を残している。

・『ボレロ』（1928）

ラヴェルの作品で最も有名である。最初から最後まで同じリズムが繰り返される中で、メロディーも２パターンしかない。

・『ダフニスとクロエ』

・『マ・メール・ロワ』

「マザー・グース」を題材にして作曲されたピアノ連弾曲をもとに編曲された。

ダフニスとクロエ

『ダフニスとクロエ』について

3世紀頃の古代ギリシアで書かれた恋愛物語をもとに作曲された。エーゲ海に浮かぶレスボス島の牧歌的な情景を舞台に、少年ダフニスと少女クロエの恋愛物語が描かれている。

本来バレエ音楽として作曲されたが、「ボレロ」「スペイン狂詩曲」と並んでラヴェルの管弦楽曲の主なレパートリーとされ、演奏会などで演奏されることも多い。その理由としては、この作品はバレエ的でなく曲の基盤がリズムよりもメロディーに置かれており、バレエに必要ない合唱までも用いているためであるとされている。また、ラヴェル自身も自伝においてこのバレエ音楽を３部からなる舞踏交響曲であると述べている。

作品の舞台となるレスボス島

あらすじ

『ダフニスとクロエ』は、2世紀末から3世紀の初めごろ古代ギリシアで書かれた恋愛物語である。作者はロンゴスと言われているが、作者に関する情報はほとんど残っていない。

物語の舞台は、エーゲ海に浮かぶ美しい島「レスボス島」。主人公のダフニスとクロエはそれぞれヤギと羊に育てられた捨て子であった。二人はヤギ飼いと羊飼いにそれぞれ拾われ、美しく成長していった。ある日、牛飼いのドルコンが美しいクロエに恋をし、クロエを抱擁しようとする。それを見たダフニスは、はじめて嫉妬に似た感情を覚える。そして、ダフニスとドルコンは、どちらがクロエにふさわしいか踊りで決着をつけることになる。この戦いにはダフニスが見事勝利し、クロエから抱擁を受ける。

そんな平和な島に突如海賊が現れる。運悪くクロエは海賊に捕まり、さらわれてしまうのであった。

海賊の陣地に連れてこられたクロエは、海賊の頭に何か1曲踊れと命令され踊り始める。隙をうかがい逃げ出そうとするクロエだったが、すぐに連れ戻されてしまう。すると突然、パンの神が現れ、驚いた海賊たちはたちまち逃げていくのだった。

ダフニスはクロエのことを心配し、羊飼いたちとあたりを探し回る。とそこへクロエが姿を現す。無事に再会を果たした二人はかたく抱擁し合い、全員で祝福の舞を踊り幕が閉じる。

Interview Ⅰ

音楽学部指揮専攻 教授　下野 竜也 先生

①下野先生は本年度から本大学に着任されましたが、4月から今までの間で持たれた京芸の印象を教えてください。

生徒さんは向学心に溢れていて、とても真摯に勉強に取り組まれているという印象を受けました。

②下野先生ご自身が学ばれた鹿児島や東京と京都、その地域による違いなどは感じられますか。

僕は最初、教育学部に所属していたのですが、キャンパスも広く自然も多く、そして大らかな感じが鹿児島大学の雰囲気と似ています。
東京では桐朋学園大学で学んだのですが、ここは専門的な学校であったので、やはり鹿児島の頃と雰囲気も違いました。京芸はやはり大らかで、のんびりしていて、だけど一人一人はすごくレベルも高く、真面目に取り組んでいる印象です。

③これから京芸の学生と築いていきたい関係性、これからの展望を教えてください。

高校と違って大学というのは、1+1=2の「2」といった答えを勉強するのではなく、その問題について、そして答えの導き方を学ぶところです。なので、大学は塾とは違って教師が生徒にものを教えるところではありません。だから僕らも音楽家としての研鑽を積んで自分たちの研究をより良いものへと目指していかなければならない。そういった研究を、学生達も一緒に行っていく環境が大学だと思うのです。
そこで僕が1番こうでありたいと思うのは、教師側が生徒に一方通行にああだこうだと教えるのではなく、学生も自分たちで色んな方法を探していき、ともに研究していく関係であることです。

指揮専攻に関して言えば、作曲家とどう取り組むかといった姿勢を保ちつつ、学生一人一人が指揮者として歩き始めるための勉強を行なっていければと思います。
オーケストラに関していえば、教師と学生という関係ではなく、一指揮者と一音楽家。僕がこの大学に来て１ヶ月あまり、皆さんにはプロのオーケストラを振るつもりで指揮を振っています。だから、学生さん達にもプロのオーケストラに参加するような姿勢で取り組んでほしい。それぞれの学生が将来プロの音楽家として活動していくためのシミュレーションを行えるような環境を作りたいと思っています。
また勉強の面に関していえば、僕は皆さんよりも歳上ということもあるので、それぞれ学生さんたちの手助けをしていければと思います。

④下野先生について、「とても丹念な譜読みと研究に定評がある」と伺いました。具体的にどのように研究などをなされているのか教えてください。

クラシック音楽の演奏っていわゆる伝統というものがありますよね。しかしそれが本当に正しいのかどうかは分からないじゃないですか。作曲家が本当にこう書いたのか、何を思って書いたのかを知りたければ、やはり楽譜や自筆譜などのあらゆるソースを基に勉強していかないといけません。

歴代の偉大な音楽家たちが演奏してきたスタイルも、もちろん尊いと思うのですが、習慣や伝統だけで演奏するのはどうかと思うのです。だからいわゆる原点回帰として、本当はどう書いていたのか、ということを調べたり本を読んだりします。

例えば何かの作品を演奏するにしても、本来はこういうことを望んでいたのではないのか、ということがあればオーケストラに提案していきます。先入観にとらわれずその作品と対峙する、というのが自分の１つのポリシーです。

⑤今回の定期演奏会の聴きどころを教えてください。

今回のプログラムは、まずダフニスとクロエに関しては、京芸の学生たちのほぼ全員が参加でき、どの楽器も活躍できる曲として、今まで扱ったことがないということなので挑戦できれば良いなという思いで選曲しました。

その反面、ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンといったオーケストラの基本中の基本となる古典派作品にも挑戦したいと思いました。「第九や運命などは演奏したことはあるけれど、第1番は演奏したことがない」という方が多いのではないかと思います。

よって前半に古典派作品、後半にフランスもの、といったバラエティに富んだ、いわゆる定番メニューでない、芸術大学らしいプログラムとなりました。前半と後半で、お国柄やオーケストラの音色の違いをお楽しみいただければと思います。

それぞれの曲の聴きどころは、ベートーヴェンの交響曲第１番に関していえば、大事なのはこの曲が書かれた当時は、まだ運命や第九などが生まれていなかったということです。まだ若い彼が、ボンから大都会のウィーンに出てきて初めて交響曲を書き世に通るということは、本当は我々が思っている以上にすごいことです。だからこそフレッシュなベートーヴェンの音楽を感じて欲しい。その時代のベートーヴェンは若くて元気で、夢や希望、パワーもエネルギーもあり、難聴もあまり進行していないのです。

そして、実はこの第1番は、管楽器の使い方であったり、不思議な和音で開始されたり…と革新的な作品でもあります。現代では第1番を聴いてもハイドンやモーツァルトの延長にしか聴こえないかもしれませんが、本当はこの作品は大胆な彼の第一歩となるものです。そういったことを京芸の皆さんと表現できればと思います。

トマジのサクソフォン協奏曲、これはサクソフォン作品の名曲中の名曲。生で聴く回数は少ないでしょう。オーディションで勝ち抜いたソリストの福田さんの演奏とともにお楽しみいただければと思います。

ラヴェルの『ダフニスとクロエ』に関しては、緻密で筆致なオーケストレーション、作品の華やかさをお客様に堪能していただければと思います。今回は合唱の出番もあるので、物語の様々な情景が浮かばれるような演奏にしたいです。また京芸の学生がみせるヴィルトゥオーゾ的な技量にも注目です。

⑥この冊子を読む京芸の皆さんにメッセージをお願いします。

書かれている音符をきちんと並べるだけでも大変です。しかし、大学にいる間は少しでも作曲家の背景や、そのときどのような目的で書いたのか・・・楽譜には書かれていないことにも興味をもって演奏すると、より作品を身近に感じます。それが卒業して仕事するようになると、時間に追われるようになりどんどん難しくなります。我々の業界の仲間にも学生の頃にあれを勉強していたらよかった、などと言う人も多いです。若いうちはまずスキルアップが第１だとは思いますが、時間のある学生のうちに、なるべく楽譜の向こう側に興味をもってください。

また、今回定期演奏会に聴きに来てくださる音楽学部の学生に対して思うことは、自分たちの仲間がステージに立っているところを応援してほしいということです。そして率直な感想を投げてあげてください。お互い仲間だからこそ言えることがあると思います。ただ聴くだけでなく、この演奏家は何を表現しようとしているのか、想像力を働かせてください。娯楽や趣味として聴くことと、仲間の演奏を聴くことはやはり違います。同じ大学の仲間の中で意見の発信と受け取りを行うと、良い関係が生まれるのではないでしょうか。

（聞き手：音楽学専攻2回生　栗田萌、山本恵利佳）

Interview II

管・打楽専攻 4回生　福田 彩乃さん

①サクソフォンをはじめたきっかけを教えてください。

中学1年生の時に吹奏楽部の体験入部へ行ったのがきっかけです。もともとピアノを幼稚園の頃からしていて音楽に興味はあったのですが、当時新体操もしていたため、吹奏楽部にはいるか、新体操を続けるか悩んでいました。
結局、体験入部の際の楽器体験でサクソフォンの面白さ、かっこよさに惹かれ、新体操を辞めて吹奏楽部に入部することとなりました。
担当楽器は、入部後希望楽器を伝えて、先輩が割り振るという感じだったので、第一希望のサクソフォンを通してくださった先輩方に感謝しています。

②福田さんにとってのサクソフォンの魅力、そしてこの楽器の難しさを教えてください。

サクソフォンは人の声によく似ています。人に語りかけるような音色を出せることが何よりの魅力だと考えています。
また、サクソフォンは他の楽器に比べると音の出しやすい楽器です。そのため、「音を出す」という難しさではなく、「どこまで追求して音色を磨くのか」ということがこの楽器の難しさだと思います。

③クラシック音楽のジャンルでのサクソフォンは、フランスの作曲家の作品が非常に多いですが、その中でもアンリ・トマジのサクソフォン協奏曲を選ばれたのは、どのような想いからですか？

この曲はサクソフォン協奏曲の中でオーケストラの編成が大きい作品です。サクソフォン協奏曲といえば、音楽大学や芸術大学の入学試験課題曲にもなることが多いアレクサンドル・グラズノフの協奏曲が有名ですが、この曲はサクソフォンと弦楽オーケストラのための作品のため、編成は小さいものとなります。
サクソフォンはオーケストラの中で使われることが少なく、京都市立芸術大学のみんなと演奏する機会があまりありませんでした。私は、ソリストになりたかったということよりも、大学で一緒に音楽を学んでいる仲間と同じ舞台に立って演奏したいという想いの方が強かったのです。より多くの仲間たちと演奏したかったため、須川展也先生、國末先生が勧めてくださった編成の大きいトマジのサクソフォン協奏曲を選びました。

④この曲の中で特に苦労した部分があれば教えてください。

この曲ということに関してではないかもしれないのですが、私は暗譜がとても苦手で、オーディションの際に暗譜で演奏する、ということに苦労しました…。オーディションは今までの本番の中で一番緊張していたと思います…。

⑤聴きどころを教えていただけますか？

この曲は哀愁漂うところや元気なところ、ミステリアスなところなどたくさんの場面があります。曲がどのように進んでいくのか、どんな場面なのか想像しながら聴いていただけたら、と思います。
また、サクソフォンとオーケストラが会話をしているような箇所がたくさんありますので、そちらにも注目して聴いていただきたいです。

⑥最後に演奏会にきてくださるお客さまにメッセージをお願い致します！

サクソフォン科が新設されて4年目。第1期生として、定期演奏会で仲間たちと共にサクソフォン協奏曲を演奏できることが何よりの誇りです。
ご来場くださるお客様や、この機会を与えてくださった方々、今まで支えてくださった方々に感謝の気持ちを込めて演奏したいと思います。
皆様のご来場、心よりお待ちしています。

（聞き手: 音楽学専攻3回生 松浦 佑美）

参考文献

・原書監修:ジョン・バウロズ　日本語版監修:芳野靖夫　翻訳:松村哲哉
『クラシック作曲家大全―より深く楽しむために―』
日東書院本社　2013年

・久保田慶一、片桐功、吉川文、岸啓子、長野俊樹、白石美雪、高橋美都、三浦裕子、茂手木潔子
『はじめての音楽史　増補改訂版　―古代ギリシアの音楽から日本の現代音楽まで』
音楽之友社　2009年

・平野昭『作曲家 人と作品シリーズ　ベートーヴェン』　音楽之友社　2012年

・解説:諸井三郎　『ベートーヴェン　交響曲 第1番 ハ長調 作品21』
全音楽譜出版社　2016年

・池辺晋一郎
『ベートーヴェンの音符たち 池辺晋一郎の「新ベートーヴェン考」』
音楽之友社　2008年

・『ニューグローヴ世界音楽大事典　第11巻』
講談社　1994年

・『ニューグローヴ世界音楽大事典　第19巻』
講談社　1993～1995年

・『最新名曲解説全集　第6巻　管弦楽曲Ⅲ』
音楽之友社　1980年